

趣旨説明

菊地滋夫
明星大学

公開シンポジウムの趣旨について説明いたします。

本日お集まりの皆様はご存じかと思いますが、昨年暮れに中央教育審議会の答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の具体的改革について」、いわゆる高大接続答申が出されました。

言うまでもなく、現在は社会が急激に変化する時代です。今、小学校で学んでいる子どもが就労する年齢になった時、今日の我々には想像できないような仕事に就いているかもしれませんし、今日は当たり前にある仕事その頃にはなくなっているかもしれません。高大接続答申では、どれほど変化の激しい世の中になっても自分の人生を切り開いていく力、しかも他人を押しつけるのではなく、助け合いながら幸せな暮らしを営んでいける力を、子ども1人ひとりに育むことが大切であると述べられています。そして、教育システムに部分的に手を加えるのではなく、初等中等教育から高等教育までを通じた教育システムを充実させることの重要性を訴えています。

高大接続答申には、既にさまざまな取り組みや努力がなされ、いくつか改善されていることがあるという記述もあり、アクティブ・ラーニングを導入する大学などが例として挙げられています。その一方で、高校教育と大学教育、両者をつなぐ大学入学者選抜については、どうしても知識の暗記や再生に偏りがちであり、生徒・学生の「真の学力」は十分に育成・評価されていないという指摘も、高大接続答申の中でなされています。もちろん知識や技能は必要であるものの、知識や技能を踏まえた思考力や判断力、表現力、さらには主体的に多様な人々と協働する態度などが十分には育成・評価されていないのではないかと、いうわけです。高校の授業については、従来の大学入学者選抜が知識偏重型だったこともあり、知識伝達型にとどまりがちだった。これが、高大接続答申の見解です。

大学教育にも課題が多々あります。例えば、従来批判されてきたように、学生の学修時間が少ないことです。また、学生の学びに向かう姿勢も大きな課題の一つです。だからこそ大学の初年次教育では、学生を高校までの受動的な姿勢から、大学で学ぶのにふさわしい能動的な姿勢に転換させることに力を入れ、学生の主体的な学習意欲を引き出せるように、授業形態も変えてきたのです。ただ、大学教育全体を見ると、まだ一方的な知識の伝達・注入にとどまる授業形態が目立つという厳しい指摘を、我々は受け止める必要があると思います。

こうした状況を打開するために進められているのが高大接続改革で、大学入試改革という側面があります。高大接続答申でも、ただ知識の量だけを問う従来の大学入学者選抜の仕方を改め、多角的・多面的に入学者を選抜できるように、2020年度から新たな試験を導入すると記されています。マスメディアでの報道などからは、新しい入試に対する関心

の高さがうかがえます。

大学入試改革の狙いは、従来の一方的な知識の伝達・注入に偏りがちだった大学での学びにアクティブ・ラーニングを導入することです。高大接続答申では、アクティブ・ラーニングを「学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていく能動的学修」と定義し、これを応用することの重要性が強調されています。

従来の知識伝達型の授業では私たち教師が何を教えるかが重視されがちでした。しかしこれからは、生徒・学生が何を学び、何に影響を受けたのか、さらに、相互に学んだのかという学び方をも重視するように、パラダイムの転換が進むでしょうし、現に進みつつあると思います。アクティブ・ラーニングは多様性を前提としていますから、均質性を前提とする従来の学びと異なって競争一辺倒ではなく、他者と力を合わせて学び、問題を発見し解を見いだしていくことが求められます。

本日のシンポジウムのポイントをお話します。ご覧いただいている図は、アクティブ・ラーニングがかなり進んでいるということを示しています。児童や生徒、学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていくアクティブ・ラーニングへと、小学校、中学校、高等学校、さらに大学というように教育システム全体が舵を切っていく。そうした改革が進みつつある中、大学教育の起点としての初年次教育は今後どのような役割を果たしていくべきなのかを、この機会に考えたいと思います。

明星大学では初年次教育として、毎年迎える2,000人以上の新入生が学部混交で68のクラスに分かれ、いわゆる学部・学科を横断化して学び合う授業「自立と体験1」を実施するようになって、今年で6年目になりました。「自立と体験1」は、他学部や他学科のクラスメート、担当の教員、上級生、大学職員、卒業生にさまざまな助けを受けながら学ぶ授業、つまり多様な人たちとのかかわりを大切にした授業です。また、受講するのは入学したばかりの1年生ですから、必ずしも全員に将来の目標が明確に備わっているわけではありませんが、社会に出てからの自己実現に向けて自分がどのような学生生活を送るべきかをどの学生も明確にできるように、大学卒業後を視野に入れさせることに力を入れています。そのためか、「自立と体験1」を行うようになってから入学した学生では、留年・離籍率が低下しています。

ただ、大学教育は初年次だけで終わるわけではありませんから、2年次以降の学びをいかに再構築していくかも重要な課題になります。この課題をうまく解決するためには、各大学の歴史や特色を踏まえて検討する必要があるほか、大学関係者による議論に終始せず、もっと開かれた対話が欠かせないはずです。もちろん、高大接続ですから高校と対話を重ねる必要がありますが、それだけで十分と言えるでしょうか。教育システム全体の社会的な役割を構想しながら、小学校とも中学校とも対話を継続し発展させなければならないと、私は考えています。

本日は、大学の教職員の方々、学生の皆さんだけではなく、高校の先生方をはじめ教育に関係されている多くの方々に集まっていただきました。学校種を超えた対話、学校と社会との対話の機会として、このシンポジウムを位置づけたいと思うからです。皆様の積極的なご参加をお願い申し上げます。

以上、簡単ながらシンポジウムの趣旨説明とさせていただきます。ありがとうございました。

初年次教育学会 第8回大会 公開シンポジウム

変わる初等中等教育の学びと 大学初年次教育

菊地 滋夫 (明星大学)
kikuchis@ge.meisei-u.ac.jp



1

「高大接続答申」(2015年12月22日)

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた
高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について

- 社会の急激な変化(生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、グローバル化・多極化など)
- 将来、職業の在り方も大きく変化する可能性

それぞれの夢や目標の実現に向けて、自らの人生を切り拓き、他者と助け合いながら、
幸せな暮らしを営んでいける力を育む

そのためには、初等中等教育から高等教育までを通じた
教育の在り方を示すことが重要



2

現在までの改善と課題

- 主体的に多様な人々と協力して問題を発見し解を見だしていく「アクティブ・ラーニング」の改善(大学)
- 他方、高等学校教育・大学教育・大学入学者選抜は、知識の暗記や再生に偏りがち

その結果、「真の学力」は十分に育成・評価されず

真の学力とは

- 思考力・判断力・表現力
- 主体性を持って多様な人々と協働する態度など

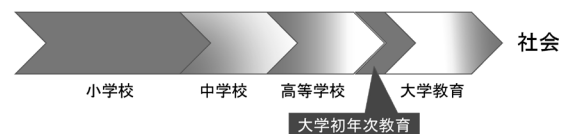
「とくに高等学校の授業は知識伝達型に留まりがち」との指摘



3

日本の大学教育の課題

- 学修時間の短さ
→ 1週間の学修時間が11時間以上の学生は、
日本では約15%、アメリカでは約59%
- 一方的な知識の伝達・注入に留まる授業形態が多い



受け身の勉強になりがちな高校生を「能動的な学習者」へと移行させることは、大学初年次教育の重要な役割のひとつなのだが、その後の授業は？



4

打開策としての高大接続改革

「大学において育成すべき力」を明らかにしたうえで...

- 「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の導入
- 各大学が「アドミッション・ポリシー」を設定し、「多面的な入学者選抜」を個別に実施
※ 現行の大学入試センター試験は廃止

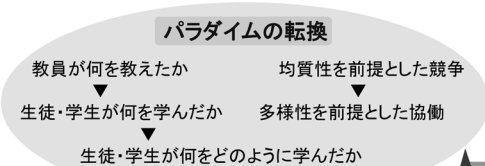
入試改革が注目される一方で、「どんな教育を実現すべきなのか」という議論は背景へ...



5

大学入学者選抜改革の方向性

- 一方的な知識の伝達・注入に偏りがちな高校や大学での学びに、生徒・学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見だしていくアクティブ・ラーニングを導入すること



6

本日のシンポジウムのポイント



- 日本の教育システム全体が、生徒・学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていくアクティブ・ラーニングへと舵を切っていく改革であることに注目
- 大学教育の起点としての「初年次教育」は、今後どのような役割を果たしていくべきか

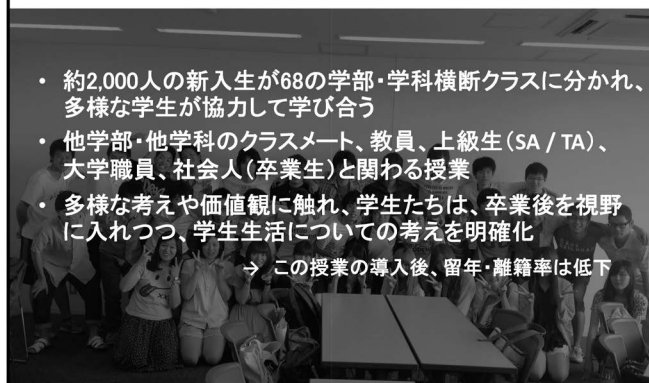


7

明星大学における全学初年次教育科目 「自立と体験1」(2010年～)

- 約2,000人の新生が68の学部・学科横断クラスに分かれ、多様な学生が協力して学び合う
- 他学部・他学科のクラスメート、教員、上級生(SA / TA)、大学職員、社会人(卒業生)と関わる授業
- 多様な考えや価値観に触れ、学生たちは、卒業後を視野に入れつつ、学生生活についての考えを明確化

→ この授業の導入後、留年・離籍率は低下



8

初年次教育～大学での学びの構想

- 各大学が、それぞれの歴史や特色を踏まえて検討
- だが、大学内部での閉じた議論や、高校-大学間でのすり合わせだけでは不十分

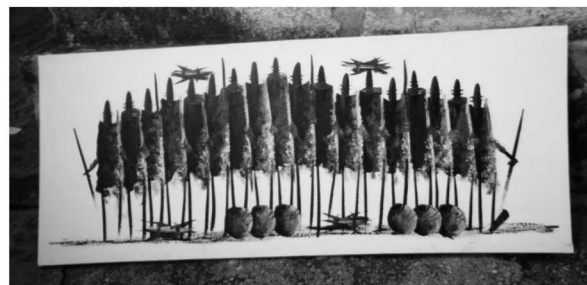
教育システム全体の社会的役割を構想しつつ
小学校、中学校、高等学校、大学などの学校種を超えた
対話の継続・発展が極めて重要

学校種を超えた対話
学校と社会の対話



9

ご静聴ありがとうございました



Milima haikutani, lakini binadamu hukutana.
山と山は出会わないが、人と人は出会う。

—— スワヒリ語のことわざ



10